

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫

◆◆◆ No.0566 ◆◆◆

20/01/08

【 3 年連続「1 月相場は大相場」、今年も要注意!? 】

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。皆様にとって、良い一年でありますように。

昨年 1 月 3 日に記録した「フラッシュクラッシュ」に比べれば可愛いものだが、ドル/円相場は年明けからドル安・円高が進行するという、なかなかアクティブな動きをたどっている。
ただ、そんな昨年のドル/円は、年間を通し結果として記録的な小変動に終わるなど、1 月にみせた積極的な動意がそののち急速に萎むという展開が経験則にも少なくないようだ。以下では、恒例である経験則から見た 1 月相場、月間見通しについてレポートしてみたい。

◎ただ、「1 月大相場」は「年間小変動」の一の予兆の可能性も

まずは、1 月相場の戦績について、1990 年以降昨年まで過去 30 年間の振り返ってみると、勝率は 13 勝 17 敗となっている。

それだけを見ると、大きく偏っているわけではないが、ひとつ興味深いのは比較的近年はドル安・円高が有利であるということか。たとえば、2014 年以降ではドル高・円安方向に動いたことはたったの一度(2016 年)しかなく、残りの 5 回はすべてドル安・円高に振れていた。かつては、年末にかけて観測される「リパトリエーションの反動」や「新年、あるいは新しい四半期に入ること機関投資家を中心とした新規外債投資が期待できる」一ことで需給要因的にはドル高有利といった指摘も聞かれたものの、ここ最近はその古い経験則が通用しなくなっているのかもしれない。

そんな 1 月相場には、特徴が幾つもあるのだが、なかでも興味深いものとなると、以下の 3 つだろう。ひとつずつ順を追って説明を施したい。

最初に取り上げるのは、「月間を通した値動きが両極端である」ことで、動く年はかなり激しい価格変動を記録するものの、逆に動かない年はピタリとベタ凧状態が続くことが少なくない。
前者の「よく動く 1 月相場」については、改めて指摘するまでもなく、昨年の展開が思い起こされるところ。事実、昨年の 1 月相場は変動幅 5.90 円で年間 1 位の変動を記録していた。また、その前年である 2018 年は変動幅 5.10 円でやはり同 1 位、2017 年も変動幅 6.52 円で同 1 位一となっている。つまり、3 年連続で 1 月がかなりの大相場をたどっていたわけだ。

しかし、ここで思い出していただきたいのは、昨年 12 月 11 日の当レターなどで取り上げた「2019 年のドル/円は歴史的な小変動」で終了したということ。また、昨年同様に 1 月相場が荒れ模様だった 2017 年と 2018 年のドル/円も、やはり記録に残る小変動をたどっている。詳細はバックナンバーを参考にされたいが、過去の年間変動率が 16%、同変動幅が 18 円となるなか、2017 年は 9.7%と 11.3 円、2018 年は 8.8%と 9.9 円。そして昨 2019 年は 7.6%と 8.3 円だった。
つまり、1 月に大きく動くと、以降は急速に尻すぼみになることが多く、辛辣な言い方をすれば「荒れる 1 月相場は、年間を通した小動きの予兆」一とさえ言えるのかもしれない。今年一年の相場を見極めるうえで、今月の価格変動には要注意だ。

次に、一年 12 ヶ月を比べて見た場合、不思議なことにドル/円相場は「1 月に一年の天底をつける」ケースが非常に多いということ。

実際、1990 年以降昨年までの 30 年間で 12 回の「年間天底」を記録していた。確率にすると、およそ 4 割であり、実際に比較的喫緊の事例だけを取り上げても、2016 年と 2017 年は 1 月に年間のドル最高値を示現しているほか、2013 年と、昨 2019 年は逆に 1 月安値が結局年間を通したドル最安値となっていた。毎年必ず起こる事象ということではないが、今年についても一応注意しておきたい。

最後 3 つ目の特徴は、「1 月の月足陰陽と、年足陰陽が同じになる確率が高い」一ことだ。1 月の月足が陽線であれば、その年一年間は年間を通してドル高・円安に振れる公算が高く、実際に年足も陽線引けと

